

新潟大学広報誌

新大広報

campus
forum

Niigata University Campus Magazine

2007年早春号

No.163

特集

新潟大学の 日々 ~旅立ちの日に~

学長からのメッセージ

shindai NEWS

全学講義開講

CAMPUS INFORMATION

第55回 卒業制作展

花嫁暖簾 ● 阿部育子

message

学長からのメッセージ

卒業生、大学院修了生及び

退職される教職員の皆さんへ

新潟大学長

長谷川 彰



平成十九年の早春に新潟大学を卒業される皆さん、大学院を修了される皆さん、ならびに新潟大学を退職される教職員の皆さんに、心よりお祝い申し上げます。

卒業生ならびに大学院修了生の皆さんは、これまでの学究生活を通して、学問の深遠さと厳しさに触れられましたが、今後どのような道に進まれようとも、学問に対する真摯な姿勢を保持していただきたいと願っております。また、皆さんがこれまでに得た成果や、新しい発見に遭遇したときの感動を若い世代に伝えていただきたいと思います。

現代のように社会情勢が大きく変化する時代にあって、皆さんには、自らの専門とは異なる分野へも挑戦するたくましさを持っていただきたいと思っております。このような勇気は、新たな可能性を切り開く契機ともなり得るものであります。常に新しい知識を吸収しながら、新しい価値を創り出し、自己を改革していく自律的な姿勢を持ち続けていただきたいと思っております。

皆さんには、自信と誇りを持って、地域社会や国際社会における多様な場で活躍し、それぞれの立場で社会に貢献しながら、自立して生きる力を培っていただきたいと思っております。また、社会に対する責任を自覚し、より高い公共性と倫理性を身につけ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、さらには改善していく気概を持っていただきたいと願っております。

退職される教職員の皆さんは、永年にわたり新潟大学の発展にご尽力いただきました。五十嵐キャンパスへの統合移転、国立大学法人化など、数々の局面において新潟大学を側面から支えてこられた皆さんに、あらためて深く敬意を表するとともに、心より感謝申し上げます。今後とも健康には十分に留意され、ますます充実した日々を過ごしていただきたいと思っております。

私たちが住む新潟は、海や川、山や平野に抱かれ、四季を通して清らかな水と大地の恵みにあふれた豊かな地であります。美しい自然に囲まれたキャンパスで過ごされた皆さんにおかれましては、時には、水と緑を基本とした生き方の原点に立ち返り、これからの社会の在り方や地球環境問題などを考えていただきたいと思っております。

法人化を機に、本学は、教育研究の質のさらなる向上を目指して、総合大学の特質を活かした新しい大学づくりに取り組んできました。とりわけ、教育面における本学の重点課題と位置づけている新学士課程教育システムの構築には、平成19年度も継続して特別教育研究経費が措置されることが決まりました。この取組を含む諸事業を軌道に乗せることにより、今後とも本学の理念・目的の達成を目指していきたく思います。

平成18年4月、新潟大学全学同窓会が発足いたしましたことは、誠に喜びに堪えません。卒業生と大学院修了生の皆さんにおかれましては、これからは同窓会活動を通じて、新潟大学を力強く支援していただきたいと願っております。また、退職される教職員の皆さんにおかれましては、新しい新潟大学の発展ぶりを温かく見守っていただきたいと願っております。

ここに人生の一つの区切りを迎え、新たに出発される皆さんに、あらためて心よりお祝い申し上げます。

時には、水と緑を基本とした生き方の原点に立ち返り、
社会の在り方や地球環境問題などを考えていただきたいと思っております。

今後とも常に新しい知識を吸収しながら、
自己を改革していく自律的な姿勢を
持ち続けていただきたいと思います。

特集

新潟大学の 日々

～旅立ちの日～



卒業・修了する学生からの メッセージ

学業、スポーツ、交友、ボランティア活動、アルバイトなどなど。
充実した学生生活を振り返って、その想いを語っていただきました。

4年間を振り返って

人文学部

行動科学課程

安藤 孝之

ANDO, Takayuki

月日が流れるのは本当に速い。正直4年間がこれほど短いとは思わなかった。さまざまな出来事があったはずなのに、今は断片的にしか思い出せないのが少し寂しい。

振り返ってみると、私にとって大学生活とは「学び」の場であった。自分で考える機会が多くある大学で、私は学ぶ楽しさを初めて知ったように思える。3年次には海外語学研修にも行くことができ、充実した学びの時間を過ごすことができた。

そして大学生活は「交友」の場でもあった。特に部活では、下らない話でも真面目な話もできる素晴らしい友人たちに出会えた。またその部活等で多くの子どもたちとも出会えた。私の大学生活が楽しいものになったのはひとえに彼らのおかげだ。本当にいい出会いをしたと思う。

この充実した4年間の記憶もいつかは色褪せてしまうだろう。でもその時でも、新潟大学で身につけた経験がどこかに生かされていればなあと思う。私にかかわったすべての人に「ありがとう」と、い言いたい。



本人は左から2人目

教育人間
科学部

4年間を振り返って

学校教育課程

下條 浩史

SHIMOJO, Hirofumi

「きつといい先生になれますよ。」

3年次、教育実習先の生徒が言ってくれたこの言葉は、私の心に強く残っている。

数年前に、この大学のこの学部を受験したのは教師になりたかったからだ。目的意識をもった4年間は自ずと充実し、日々の講義や教育実習での現場経験から多くの学びを得た。また、こうして学んできたことに加え、学科・ゼミ、ボランティア等を通した大学生活での多くの出会いや硬式野球部に所属し、主将を務めたことも私の財産である。たくさんの刺激を受けると同時に、楽しい思い出も数えきれない程できた。素晴らしい先生方や同学年の仲間、先輩・後輩に深く感謝したい。

結果的に採用試験には合格できず、4月から講師として中学校の現場に立つ。経験を重ね、今後も諦めずに挑戦したい。4年間で充実していたからこそそう言えるのだと思う。



本人は前列中央

法学部

4年間を振り返って

法政コミュニケーション学科

大森 公博

OHMORI, Naohiro

「教わって『知る』、それを自分で使えるようになるのが『分かる』、そのように深めるうち、はじめての難しいことも自力で突破できるようになる。それが『さとり』ということ。」という大江健三郎さんの言葉があります。何かを知るためではなく、何かを分かるためのきっかけをたくさん与えられた4年間だったように思います。

大学生活という4年間の貴重な時間は、私にとって様々な出会いの場でした。4年間でいくつもの出会いどれ一つとっても、今の私はないと感じています。このような貴重な時間を過ごすことができたのは、家族や友人、先生方、多くの人の支えがあったからだと思っています。多くの支えがあって今の自分があることを忘れずにいたいと思います。

最後になりましたが、卒業にあたり今まで私を支えて下さった多くの方々に感謝致します。



一食前広場にて

経済学部

卒業にあたって

経営学科

董 影

DONG, Ying

私は編入生として新潟大学に来ました。僅2年間の勉強でしたが、私の人生の中で大変有意義な大学生活を過ごしました。最初新潟に来た頃は誰も知らずに寂しかったけれど、いろいろな授業を受けていくうちに専門知識をたくさん吸収しました。そのうえ、友達もたくさんできましたし、特に夜間の社会人と一緒に勉強することを通じてもっと深い勉強の大切さと魅力を感じました。また、大学の先生方のほかに実務家による授業を受けて、私は将来自分の進む方向を考えるきっかけとなりました。さらに国際課による留学生のための様々な行事に参加し、そのお陰で日本人と留学生同士の間で深い交流ができ、国が違ってもお互いに相手の価値観や習慣を尊敬すべきと思いました。皆様のお陰で大学生活の中からいくつもの新しい自分の可能性を発見でき、そして挑戦し、実現できたことに本当に心から感謝しています。今後は皆様から得た力と勇気をもって自分らしく生きようと新たに旅立ちます。



本人は右側

理学部

卒業するにあたっての思い

自然環境科学科

永瀬 康一

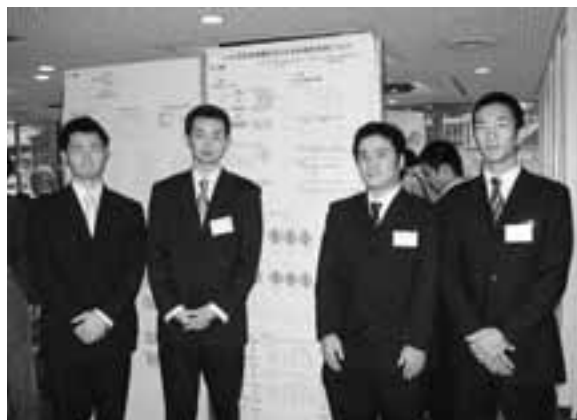
NAGASE, Kouichi

率直に言えることは大学生活がとても短かったということです。また中身が大変濃く、非常に充実した4年間でした。多くの出来事の中で印象に残っていることは卒業研究です。

増田研究室の物性論ゼミでは学問はもちろん、表現能力の大切さも学びました。毎回、先生や先輩の厳しい指摘により本当の勉学とは何かを教えてくださいました。進路は大学院なのでこの経験を今後生きていきたいと思っています。

古人の言葉に「蔵の財より身の財すぐれたり身の財より心の財第一なり」とあります。人の振舞は心で決まる。そして、その心を大切にすることで自分の可能性が大きく広がるという意味です。将来は研究者として社会貢献します。夢に向かって心が折れないように努力していきたいと思っています。

この4年間で多くの仲間と先輩、先生方と出会えたことが自分を成長させてくれました。様々な方にお世話になったことを心から御礼申し上げます。



京都大学で行われた熱測定学会にて 本人は左端

医学部

卒業の謝辞 —百花斉放の如く—

医学科

酒井 理恵

SAKAI, Rie

卒業にあたり、一人の医学生として思うところを述べたいと思う。

私が医師を目指した理由、それは発見が遅れて重篤になった祖父の病気。何かおかしいと思ったのに、前兆を見逃した後悔にくれる家族の悲しみが自然と私に医師の道を選ばせた。大切な人の異変に次は気付けるように。

こうして入学した新潟大学は、私に「可能性」ということを教えてくれた。年齢も出身も異なる同級生には百人百様の夢と可能性がある。「物事を変えなければ自分から変わらねば」が口癖の友人とも春からは袂を分かち。医学の可能性を信じ、たゆまぬ努力と情熱が医学医療を支えていることを背中教えて下さった先生方。「良い師に出会えることを」と賤の言葉をかけて頂いた先生以上の師に出会うことは難しい。

医師となる今不安は大きいけど今日より明日の可能性を信じ旅立てる。その勇気を頂いた、出会った全ての方にお礼を申し上げたい。



Snow博士がコレラの感染経路を解明する端緒となった井戸の前にて教室の先生方と 本人は左端

医学部

看護学専攻を修了するということ

保健学科 看護学専攻

柴山 可奈子

SHIBAYAMA, Kanako

私たち看護学専攻は、卒業と同時に国家試験合格によって看護師・保健師・助産師などの資格を得ます。卒業し資格を得るということは専門職として医学や保健の最前線にでるということです。それはたくさんの生命に関わり責任がとても大きいため、不安はたくさんあります。しかしこの4年間、夢を叶えるため様々な専門知識を学び、臨地実習では多くの患者さんたちに関わってきました。途中厳しい現実もたくさんありましたが、結果として今、入学したての頃は医学の事など何も知らなかった私たちが、患者さんの身体、心、生活を専門的な目で判断し、看護の心で接することが出来るまでになりました。今までの学生生活の中で学んだ、人との絆や思いやりの心、正確な判断力は看護の基本であり、私たちの得た大きな財産だと思えます。不安は確かにありますが、その財産を生かし、1歩1歩誠実に歩みたくさんの人の体と心を支える人間になりたいと思っています。



医学祭で看護学専攻の企画としてマッサージを行った際に 本人は右端

歯学部

Birth～新しいスタートライン

歯学科

早田 晃子 リネー

HAYATA, Akiko Renee

2001年の春に入学してから早くも6年が過ぎようとしている。6年間の大学生活がどれだけ長くて短いものか、そしてどれだけ濃いものか、一言では表せない。家族であり、ライバルでもあり、仲間である友達に恵まれ、そして、たくさんの素晴らしい先生方に指導していただき、私の『学生』生活は終わろうとしている。

手探りで、全てが始まった1年生。新しい友達、新しい環境、すべてが新しかった。2年生で専門に入り、校舎も旭町にうつった。専門の授業がとても難しく感じられ、幾度と無く再試を味わった。3、4年生は色々な実習が本格的に入り、「医学・歯学」と「技」というものを意識した。また歯学祭などを通して、仲間の大切さやチームワークが成し遂げられる大きさを実感した。5年生のポリクリから6年生の臨床実習では「人対人」の責任感、一生勉強ということへの認識、そして色々な患者さんを通して、出合いの素晴らしさや、「ありがとう」の重みを感じた。

私の6年間を簡単にまとめてしまうとこのようになるが、試験期間中の苦しみや寝不足も、先生や友達との葛藤も、辛いことがあって流した涙も、全てが本当にいい思い出と今となっては思う。37期のクラスメートと別れたくないと思う反面、自分を含めて色々な人のポテンシャルや意欲を感じ、友達の10年後や20年後がとっても楽しみだ。帰国子女として本当にドキドキして入学してから卒業するまで、たくさんの思い出、経験、出合い、チャンスを与えてくれたこの新潟大学を私は誇りに思う。そして、晴れて卒業し、今スタートラインに立ち、それぞれの道を歩んでいく仲間達といつかまたみんなで成長した姿で語り合える日がくることを期待している。6年間本当にありがとうございました！



工学部

スキー部

福祉人間工学科

西井 文哉

NISHII, Fumiya

「3月10日、10時××分、天候一細雪。—— 今までやってきた努力は、全てこの日のためだ。悩み、苦しみ、疑問をぶつけ合いながら作り上げてきた団体演技が今、始まろうとしている。お互いのスキー板がぶつかりそうなほど接近し、仲間6人が「処刑台」と言う名の急斜面に立っている。気持ちは高ぶり、恐怖と緊張が入り混じりながらも団結という名の絆で繋がっている。…そして…。」

部活を4年間続けてきて本当に良かったと思う。スキーを通じて、先輩、後輩はもとより、いろいろな人との出合いがあり、成長することができた。もちろん、たくさんの人との出合いから、自分を模索し続ける4年間でもあった。今まで生きてきた22年の中で最も充実した4年間を振り返って、今心にあるのは感謝の気持ちだ。スキーに感謝、仲間と一緒に過ごしたこの時間に感謝、そして、関わってくれた人みんなに感謝している。

「ありがとう!」



本人は前列左から2人目

農学部

新潟大学を卒業するにあたっての思い～新潟大学で学んだこと～

応用生物化学科

工藤 はなよ

KUDO, Hanayo

合格通知を手にしてから早4年が経とうとしている。合格の喜びが覚め遣らぬまま期待に胸膨らませ新潟の地を踏んだ4年前。新生活への期待と未知なものへの不安とが混同したあの時の複雑な感覚が蘇る。

振り返ると、アルバイトや就職活動、研究など大学での4年間は目まぐるしい毎日だった。忙しい日々の中で己の無力さを感じたことも沢山あった。そんな時私を支えてくれたのは私を認めてくれる仲間の存在だった。友人の温かい言葉に触れると不思議と張り詰めていた緊張が解けるのを感じた。

また、苦悩は向上しようという意欲の象徴であることも学んだ。進歩を望むから悩みが生じる。そのような発想の転換を念頭に置き、苦悩しながらも課題を乗り越える経験を重ね、自分に自信をつけることができた。3月で卒業という節目を迎え、4月から私は新潟を離れ社会人となる。私は新潟大学で学んだかけがえのないものを胸に、これからの人生を一步一步歩んでいきたい。



本人は前列右から2人目

大学院
教育学研究科

感謝の日々

教科教育専攻 国語教育専修

岩船 尚貴

IWAFUNE, Naoki

月日が経つのは早いもので、2年間の研究生生活にピリオドを打とうとしている。他大学他学部から入学した私にとってこの2年間はとても内容の濃い時間だった。

「これだけやった」というバグボーンが欲しくて大学院に進学した。知識を獲得することに怠っていた学部生時代への後悔からだった。しかし、思いとは裏腹に専門外の学問の壁は高く、慣れない研究生生活は苦難の連続だった。先が見えず不安になった時もあった。そんな私がここまでやってこれたのは、苦しい時に共に励まし合える大学院の同期と、近代文学ゼミの仲間が側にいてくれてからだと思っている。

4月からは、目標としていた中学校の教壇に立つことになる。夢を掴むことができたのは、指導教員の堀先生をはじめ国語教育専修の先生方が私に力を与えてくれたからだ。そして何よりも進学させてくれた母に心から感謝し、今後も新潟大学で培った探求心を絶やすことなく教育活動に邁進していきたい。



本人は左端

大学院
保健学研究科

これからの自分

放射線技術科学分野

下田 優

SHIMODA, Masaru

大学院に入学してもう2年が経ってしまった。あっという間に2年が終わったように思う。この2年間で自分がどれだけ成長しているのか、それとも2年前と何も変わっていないのか。様々な経験をさせてもらい、生活全体を含めると多忙な2年間を過ごしてきたと思っはいるが、この経験がこれから先の自分にどう役立っていくのかは正直わからない。きっと答えはこれからの自分の行動によって出てくるのだと思う。大学院で学んだ専門分野における知識をこの春からの職場でどう活かすか、大学院を修了した自分に職場で求められるものは何かをしっかりと考えながら、これからの自分の道を歩んで生きたいと思う。

大学入学から数えると6年間、保健学科、保健学研究科の先生方には本当にお世話になりました。心から感謝いたします。そして、時々身体を壊しながらも2年間の大学院生活を支えてくれた母へ…ありがとう。



大学4年時の研究室スタッフと 本人は2列目左から3人目

大学院
現代社会文化
研究科

遅い旅立ち

地域社会形成論専攻

石井 周

ISHII, Shu

人文学部の入学試験のために、新潟駅に降り立った日のことは今でも覚えている。あれから13年。新潟大学には、学生として都合9年間お世話になった。帰省するごとに、両親は「脛がすっかり細くなった」と歎き、悪友は「まだ学校で勉強しているなんて、よほど頭が悪いんだな」とからかった。だが、これから少しは世間に胸が張れるかなと思うと、自然に笑みがこぼれてくる。両親の支え、友人の励まし、先生方のご指導のお蔭で、私はようやく羽ばたけるようになった。

思えば、修士課程修了後、台湾の旅行会社に就職し、新潟にも学問にも訣別したつもりだった。だが新潟に戻った。「台湾とは何か」と考えるようになり、博士課程に入った。台湾文学についての博士論文を提出した今でも、その疑問符は政治や歴史と絡みつき、私の心に纏わりついて離れない。目の前に広がる大空へ、これから私は答えを求めて飛び立つ。たとえ雷に打たれても、決して羽は休めない。



研究室にて

大学院
自然科学
研究科

修了にあたって。

環境共生科学専攻

吉井 エリ

YOSHII, Eri

これを書いている今、私は、修了に向けて論文書きに励んでいます。学部、修士、博士課程と、およそ10年間、新潟大学にお世話になりました。振り返ると、人に恵まれた学生生活でした。先生、先輩、友人、アパートの大家さん、隣家の方々、バイト先で…、お世話になりました皆様に感謝しています。

「どうするべきか」に縛られがちな私は、「自分がどうしたいのか」を認識していないために、自分自身とのバランスを保てず、生きていくこと、また、人間関係においても迷うことが多かったです。幸いにも、大学の保健管理センターで専門の先生に相談することで、迷いの原因となる「自分」を知ることができました。

私自身の経験より、おかしいな、うまくいかないな、というときには、保健管理センターを訪ねることをお勧めします。専門の職員さんが温かく迎えてくださいます。

生きることは楽ではありませんが、楽しみがあり、生きる価値があると今は実感しています。



野外調査の際に 本人は左側

大学院
医歯学
総合研究科

卒業にあたって

腎研究施設構造病理学分野

張 瑩

ZHANG, Ying

留学生活は“光陰矢のごとし”と言うように、あっという間の4年間だった。晴れた日に私は日本海へ行き、きれいな海・青い空・爽やかな潮風に吹かれ、4年間の留学生活を目を閉じて思い出す…。

4年間の研究生生活で最も印象的なことは、まわりの先生達の研究に対する厳格な態度と優しい心であった。先生と先輩達はいつも夜遅くまで研究を続け、その研究姿勢は私の心を尊敬の気持ちでいっぱいにし、同時に私に頑張る勇気をくれた。研究や生活に困った時、先生や先輩の応援に助けられた。4年間の記憶の中、成功した喜びがあれば失敗した戸惑いもある。すべてが私の経験であり、これからの人生の輝く財産となるだろう。今、もうすぐ去っていく校舎に立つと、別れと感謝の気持ちでいっぱいになります、お世話になった先生と先輩達、本当にありがとうございました。

中国人留学生として、中日両国民間の友情とこれから共に両国の発展、進歩を心からお祈りします。



本人は左端

特集

新潟大学の 日々

～旅立ちの日に～

退任する教員からの メッセージ

学生たちにさまざまなことを教え、多様な研究を続けてきた先生方。
今年退任される先生方に、新潟大学での思い出をお話いただきました。

人文社会・教育科学系



共に学んだ8年

人文社会・教育科学系(人文学部)教授

戸田 光彦 *TODA, Mitsuhiko*

平成11年に企業の研究所から赴任して以来、教育の難しさを体験する教員生活を過ごしました。社会情報論講座／情報メディア論コースや現代社会文化研究科で情報社会や情報システムの授業を担当し、教育を行いながら自身も学び続ける日々でした。学んだ知識がすぐに色褪せてしまう情報化の速さに不平をこぼしつつ。一方で、学生諸君と共に学ぶなかで、「情報社会とはいかなる社会か?」という問題意識に基づき研究を進めることができたのは、人文学部という場に身を置いたお蔭と感謝しています。

平成13年から就職部／キャリアセンターを担当して、学生諸君の就職支援を行ってきました。人材売り手市場のバブル期に

企業側で採用活動の厳しさを味わいましたが、就職氷河期と呼ばれた買い手市場の時期に大学側で就職支援の難しさを経験するとは予想しなかったことでした。そんな状況で前向きに仕事が続けられたのは、キャリアセンターを始めとする全学の皆様にご協力いただけたからだと思っています。ご支援いただいた皆様にお礼を申し上げます。

新潟大学でお世話になった8年は、短期間ではありますが、それまでの人生では学べなかった様々なことを学び経験した、やりがいのある教員生活だったと振り返っています。新潟大学の発展を祈念しつつ、新潟を離れ郷里に帰らせていただきます。

人文社会・教育科学系

新潟大学のシンボルとしての
ファミリー・ツリー

人文社会・教育科学系(教育人間科学部)教授
杉本 英夫 *SUGIMOTO, Hideo*

皆さんは第一食堂前の広場の総合教育研究棟寄り、メイン・ストリートに面したところに家族のように寄り添っている6本のポプラの木立をご存知と思います。5月29日から6月2日まで大学教育開発研究センターで開催されたファシリテーター研究会主催の写真展「ん?写真展」をご覧になりましたか。この写真展の作品の中にこの木立を撮影した一枚の作品(写真)がありました。作品の名は「ファミリー・ツリー」とされていました。出品者は教育人間科学部健康スポーツ科学課程2年生の尾崎常博さん(社会人入学者でジャンボ・テニス・スクール主任コーチ)です。

新潟大学は九つの学部が統合された総合大学です。各学部がそれぞれの自治の下で自由な研究と教育を実践することはそれなりの意義があることと思います。同窓会も統合された今、



新潟大学のシンボル・ツリーへ(撮影:尾崎常博さん)

やはりそこに新潟大学として統一された理念とそのシンボルが求められることと思います。尾崎さんの作品「ファミリー・ツリー」は学部間が家族のような絆に結ばれた総合大学を希求した、その表現だったように思えてなりません。

私はこの「ファミリー・ツリー」を温かさと思いやりに満ちた家族のように、自由と平和を基調とした地域に貢献する新潟大学のシンボルとして、これからも皆さんで大切に育てて行っていただきたいと願っています。

人文社会・教育科学系



過ぎ去った年月

人文社会・教育科学系(教育人間科学部)教授
皆川 興栄 *MINAGAWA, Koh-Ichi*

1980年8月、教育学部の「公衆衛生学」の助教授として招かれて約27年。担当学科は、養護教諭特別科、T教授と2人で教育、研究そして管理運営にかかわってきました。草創期の新しい科を、先行する他大学の養護教諭養成を見習いながら、学部の教職員の手厚い支援の下で新潟大学独自のカリキュラムを創り運営してきました。長くもあり短い時間でした。定年退職は人生の大きなターニングポイントですが、現役を引退する気持ちはうれしさと淋しさが交錯します。でもここが引退の潮時かなとようやく覚悟ができました。

研究生活では、数人の別科一期生と一緒にタバコと健康問題を手がけ、それがきっかけとなり、発展し、ライフスキルという健康教育の「核」に巡り合い、喫煙防止教育、薬物乱用防止教育、



定年1年前に、別科生とともに(演習室にて)

包括的のセクシュアリティ教育を手がけることになりました。数回の諸外国の実態調査や10ヶ月間の文部科学省在外研究員としてイギリス・マンチェスター大学そしてアメリカ健康財団での研究は多くの貴重な知見を得ました。在職後半の十数年間は、学んだ研究成果・知見を関連学会、本学や他大学の学生諸君や県内、県外の教育関係者に報告・講義・講演をして来ました。

このような年月を与えてくれた新潟大学内外の諸先輩、教職員、学生諸君の方々に厚く感謝するとともに、皆さまのご健康と新潟大学のますますの発展をお祈りいたします。



退任に際して

人文社会・教育科学系(教育人間科学部)教授
野中 浩俊 NONAKA, Hirotohi

昭和48年、芸術系教科の高田分校(現上越市)時代に本学に赴任して、その後、新潟市への統合移転・修士課程設置・学部改組等を経験、34年の歳月が過ぎた。

その間、主として書道実技・鑑賞論を担当し、学生の作品制作の指導に当たったが、今、退任を前にしてあらためて振り返ると、いくつかの困難に遭遇したとはいえ総じて実に楽しく充実した日々であったと感慨一入である。

旧国公立大学の中で「書道科」の設置はきわめて少なく、学生が全国から集まっているのが本学書道科の大きな特色である。また、本学では創立当初から中央書壇との関わりが少なく、独自の教育理念に基づき学生を指導するという伝統がある。このような学風の中で地方大学の特性を生かし、終始、学生との緊密な



学生展での会場風景

関係を保ちつつ制作指導に携わることが出来たのは望外の喜びである。

自らの研究に於いては、個展を主とした作品発表の他に一貫して富岡鐵齋の書美を追い求めたが、この長い道程の中で慈雲や蒼海・米山・八一等、近世から現代に至る多くの秀れた書に接し得たことは、私の生涯への無上の遺産として感謝している。

壽則多辱

人文社会・教育科学系(法学部)教授
内藤 俊彦 NAITO, Toshihiko

35年。永かっただろうか、それとも短かっただろうか。始まりは霧の中に芒乎として遙かに消えようとするようでもあり、又、奇妙に鮮明な像を結んでいるようでもある。途中で出会ったあれやこれやの出来事も亦同様である。時間的な距離の感覚が酷く乱れているようでもある。記憶とはかくも覚束ないものであろうか。あるいは、早くも老人性の痴呆現象が進行し始めたのであろうか。

学生部長・副学長を勤めた四年間は無闇に忙しく、解放されてからリハビリに手間取ったけれども、楽しかったという想いが強い。荒川・清水両先生と事務部の方々がとても気持ちよい環境

を作って下さったからである。お二人の温顔が鮮明に心に刻まれている。とはいえ、ここでの記憶も冒頭に書いた心象風景の中に明滅するあれこれの点景である。ある場面は鮮明であり、ある場面は霧の中に霞んでいる。

『莊子 天地篇第十二』に、「天下に道有れば則ち物と皆な昌え、天下に道無ければ則ち徳を脩めて間に就く」とある。私は何時まで経っても「脩徳」には縁が遠いのではあるけれども、此から後は、聖賢の教えを拳拳服膺して、せめて細い煙を立ててひっそりと過ごすことにしよう。

人文社会・教育科学系



退任にあたって

人文社会・教育科学系(経済学部)教授
西澤 輝泰 NISHIZAWA, Teruyasu

私は1981年に電気通信大学助教授から本学経済学部教授に転任しました。私は長岡市の出身ですが、本学教員には高校の同窓生が多く、公私にわたり大きなサポートをいただきました。電通大計算機科学科から本学で経済学部教員に転じ、私の世界は一気に広がりました。様々な社会的課題の根幹に経済学の問題がありますから、私の中に自然にこれらの課題に向き合う姿勢が生まれました。乞われるままに国・県・市町等の様々な審議会・委員会の長を務め、社会的課題に取り組んで来ました。日本雪工学会に加入して「積雪地域経済問題研究会」を立ち上げたり、「にいがたまちづくり学会」の初代代表を勤めたり、「にい

がた緑の百年物語」運動の呼びかけ人となって、これを推進してきたりしました。1996年に新潟県環境審議会長に就任したことを機に、ゼミのテーマを「地球環境問題」にしました。毎年多くの優れたゼミレポートが提出され、学生の優秀さにもいつも感嘆しています。本学は学ぶによし遊ぶによしの絶好の地の利を占めていて、私は夏の休日は海で泳ぎ、冬の休日はスキーをし、春・秋には信濃川べりと海辺をジョギングしてまわり、自然を堪能しています。充実した幸せな26年間を過ごさせていただき有難うございました。

人文社会・教育科学系



雑感

人文社会・教育科学系(経済学部)教授
小沢 健二 OZAWA, Kenji

現社研の発足などにもない、新潟大学に赴任してほぼ15年経ちました。五十嵐キャンパスの木々の成長とともにその季節の色彩が年々豊かになっていることに、この間の年月を感じます。人柄の良い多くの学生との巡り会い、親切的な事務職員の対応など、恵まれた教育環境のなかで時を過ごせたことに心から感謝しています。

とくに、学部で「アメリカ経済論」、全学科目で「世界の食糧・農業問題入門」を担当し、多数の学生を相手に講義できたことは幸せでした。教えることは学ぶことを痛感しつつでしたが、様々

な本を通じて学んだことを学生に伝え、少しでも対話できることは得難い経験でした。

ただ、最近数年間の新大の変化には違和感を憶え、不安も感じます。余裕がない社会状況を反映してのことでしょうか、世の流れに新大が追随しすぎている感は否めません。このまま進むと、大学が際限のないサービス機関、専門学校化する恐れもあります。”文化をじっくり培い、知ることの楽しさを学生と教師が共有する公共空間”としての大学を少しでも大切にしていって欲しい、と心から願っています。



退任に際して

人文社会・教育科学系(経済学部)教授
笹川 壽昭 SASAGAWA, Hisaaki

残すところ2ヶ月余りとなった今の心境は、在職中の39年間は何度か試練はありましたが、良き同僚に恵まれ、思いのままに研究・教育に専念できて幸せだったということに尽きると思います。

顧みますと、新潟地震のあった年(昭和39年)の3月に新潟大学人文学部を卒業し、4年後の昭和43年4月、新潟大学教養部に着任しました。当時、教養部には独立した校舎も研究室もなく、小生は他の5人の英語の先生方とプレハブの一室に仮住まいしながら教員生活の第一歩を踏み出しました。その後、移転をめぐる大学紛争や、平成6年の教養部廃止、それに伴う経済学部への配置換え、最後に独法化と目まぐるしい変化の中で定年を迎

えることになりました。

後顧の憂えなし、と願っていたのですが、近年他大学同様、学内でも英語教育や教員に対して風当たりが強くなっています。

「実用英語」と「スリム化」が強く求められ、それに対応して「改

革」も進められていますが、教育に拙速は禁物です。多少時間はかかっても現場の意見に十分耳を傾けるボトム・アップ方式による改革こそが正道だと考えます。

最後に、在職中の御厚情を謝し、新潟大学の益々の発展を念じつつ、擱筆いたします。



昭和43年11月、西大畑のプレハブ研究室前にて苅部恒徳先生(左)とともに



五十嵐浜を後にする記

人文社会・教育科学系(経済学部)教授
平木 俊一 HIRAKI, Schunichi

実務界から学界に転じたので、当初1~2年間は、担当の国際金融論や金融システム論の一学期15回分の体系だった講義準備で、夜が白々と明けることが何度もありました。それでも実証データ不足、理論武装が不十分のため、数時間後に迫っている授業が不安で、いっその事休講に出来ればと安易に考えたことが再三ありました。それでもドタキャンを一度もしませんでした。真面目でした。

教育と研究については、身を持って経験した実務をベースに、しかしそれだけでは無く、一般化・普遍化して、学生諸君に、単なる知識だけでなく、考え方を伝承出来ればと心懸けて来ました。専攻分野の性格上、事実関係とデータは常に最新のものにしていくことが、当然のこと要求され、そう努力してきました。さらに実務界の最先端部分に常に関与することで、自分の出身分野(金融)についての陳腐化を回避することも必死でした。加えて問題意識の多様化の為に、経済産業省、財務省等の中央省庁、新潟県、市、



恒例のゼミ合宿と親睦テニス大会の出発に際し

それらの外部団体の委員会の多くに積極的に参画してきました。この間自分も走りながら学びつつ、その成果を学生諸君に還元もするというのでやって来ました。

しかしながら「至らない点が多かった」というのが、率直な反省であります。

幸い健康にも恵れ、東京の専門職大学院大学への転籍も内定したので、これからもやり残したことを世の中に発表し、間接的ではありますが、新大学生諸君にも裨益出来るものがあればと誓いを新たにしています。多くの関係者に多謝申し上げつつ、松林の向うに佐渡を望見出来る研究室より、私の退任の挨拶とさせて頂きます。

人文社会・教育科学系



折角オアシスに恵まれたのに、 絶え間ない技術革新の中にもまれて

人文社会・教育科学系(経済学部)教授
高津 斌彰 TAKATSU, Yoshiaki

夏の朝、体育館裏手の松林から、海岸風致林に向かって、グランド上を20mほどの弧を描いて飛ぶ長い尾のさんこうちょうを見たのは赴任後まもなくでした。自然豊かな我が国でも、後にも先にも一度きりでした。つつどり、おおるり、きじなども見て、新潟はまさに日本のオアシスでした。もっとも、多感な学生たちには、砂漠と映っていたようですが…。

お世話になって早くも39年、世の中は変わりました。新しい学部が生まれて、大学院が発足し、絶え間もない組織改編、カリキュラムの変更が続いています。思えば、情報処理講座の単位を学部で取得してからというもの、黑白写真の現像技術や、コンピューター言語のコボルやフォートラン、湿式コピー機、オリベッティのタイプライター、渡米時のワープロすべてが、身につけたとたんに過



トヨタ自動車会館正面玄関ホールにてゼミの院生と学生とのトヨタ自動車・アイシン精機・デンソー見学訪問

去の遺産になって行きました。

慌ただしくも、刺激的なキャンパスでした。21世紀は技術の発展ばかりではなく、個人の尊厳と創造性の保証、遵法精神、企業統治の再生、各利害関係者の自主性の確立を進めたいものです。今後も新しい大学院大学の〈国際地域企業経営論〉の中で考察してゆきたいものです。大勢の諸先輩、資料室、事務方の皆さんに戴いた暖かな応援に感謝致します。

自然科学系



大学での研究教育生活 30年余りをふり返って

自然科学系(理学部)教授
橋本 哲夫 HASHIMOTO, Tetsuo

京都大学大原子炉実験所から新潟大学に赴任する直前にミュンヘン工科大学に1年間客員研究員として滞在いたしました。その折、私のボスから帰国したら余り人のやってないことを課題にして研究するようにと繰り返し言われました。新潟大学への赴任後、ドイツでのボスの忠告に従い、新しい研究課題に取り組みました。その時以来、白色鉱物からのルミネセンス(発光)測定による年代測定法の基礎と応用研究が30年以上の仕事となり、この分野では世界的にも認められる成果を、研究論文・著書関係の印刷物290編以上として公にできました。それら全ては、研究室で学生や院生および研究生生活を送られた若い人たちの協力の賜であります。関係者の方々に場を借りて感謝致します。

また、新潟大学の教員の方々には、大学発展に貢献するため



「エネルギー・環境・放射線セミナー」の会場での一コマ(2006年11月18日、アトリウム長岡で小・中・高校教職員向けに世話人代表として開催)

学生が勤勉であることを常に認識し、彼らの協力により新潟大学発の数多くの独創的な研究成果を出して頂きたいとお願いする次第です。特に数多くの論文・著作等の成果をと強調したいのは、何事であれ注目度は数に比例すると考えるからです。



40年を顧みて

自然科学系(理学部)教授
増田 芳男 MASUDA, Yoshio

昭和42年の医学部助手を振りだしに、教養部そして理学部と40年の長きにわたって本学にお世話になりました。助手になった直後の大学紛争、昭和46年五十嵐浜に新装成った教養部に移籍して23年間を過ごし、この間に区分制総合大学院自然科学研究科の設置に関わりました。その後、設置基準の大綱化を受けて廃止された教養部から理学部に移って自然環境科学科の新設に関わり、「エネルギー・環境・社会」について考える機会を得たことは貴重な体験でした。そして、最後に国立大学法人新潟大学への大変革に遭遇しました。

この間に大学の「社会化」が進み、ややもすると短兵急な結果が重視され、人材育成についても即戦力を求める風潮が強くなってきました。しかし、若い学生諸君には、広い視野を持ち、目の先のことよりも物事をじっくり観て、よく考え、先を見通す力量を磨いて欲しいと願っています。



研究室の大学院生、4年生とのスナップ

本学の第9代目の学長 茂野録郎先生は
顔ぶれの 変わりて焚き火 育ており 六花
と詠まれました。今後は、一市民として大学の発展を静かに見守りたいと思います。

自然科学系



新潟大学への想い

自然科学系(工学部)教授

小林 睦夫 *KOBAYASHI, Mutsuo*

昭和39(1964)年に本学卒業後直ぐに工学部機械工学科の助手として採用され、以来43年間の長きにわたり本学に勤務させて頂き感慨無量の気持ちです。本学に対しては、学生と職員としての二方向からの想いがあります。私の入学時(昭和35年)には、まだ本学はいわゆる蛸足大学と呼ばれ、建物は前身の古い校舎を使い各地に分散し、工学部は長岡にあり最初の1年間だけ新潟で全学部生が学ぶ時代でした。当時はどこも老朽した校舎で、38年の豪雪で長岡市は雪に埋まり、工学部の老朽校舎倒壊の危機を救えとの当時の工学部長の声明により、学生全員で昼は校舎夜は下宿先の屋根の雪下ろし作業にあけた強烈な記憶があります。老朽校舎に対する不満が無いと言えば嘘になりますが、図書館などで勉強する環境などは当時ではさほどの不満は無く、私の周りの学生仲間では、大学で広く深く学びそれを基に国全体の経済成長に貢献したいという気持ちの方が強く、それには全学部が1キャンパスに統合されて欲しいと強く思っていました。一方、当時受けた授業の一部には幼少の頃から物作りにも慣れ親しんだ私にとってはあまりにも初歩的な事柄もあり、不遜の極みで今では恥じ入りますが、授業中に面と向かって不満を述べたこともありました。そのような事もあり、恩師から大学での助手を強く勧められ勤務を決意した際には、教える立場になった時には学生から「そんなこと知ってる」とだけは言われないうにしたいと思いました。

私にとって、恩師の乱流熱伝達研究の実験・計算の手伝いと電子計算機の大学への導入が勤務開始の年でもあったので、電子計算機の利用は重要でした。しかし、初期の段階では、離れた長岡からでは手回し計算機や電卓の方がターン・アラウンド上で有利になり、ミニ・コンと称する16Kバイトの計算機が工学部に導入される頃には、その能力不足などで悩まされ、漸く工学部がこの地に移転する時期には、インターネットが整備されはじめ、離れた距離は全く無関係になるという皮肉な苦勞も致しました。これらのお陰で、コンパイラーなどの解説をしたこともあって、専門外であるコンピュータのハードとソフトにもかなり精通することができたつもりですが、現在の自動車と同様に今使っているパソコンの中身について基本的な事は知ってはいても、その詳細は全くといって良いほど分かりません。

このように、研究理論と技術の急激な進展が、それらに対してその先端にいる人だけにしか知りえない状況にさせつつあるとき、研究者や技術者の倫理が強く要求されます。本学は、私の学生時代の不満のほとんどは解消され、理想的な環境に整備されつつあります。学生諸君には広い見識を本学で身に付けて頂きたいものです。最後に、先輩諸氏と皆様のご厚情に感謝し、本学の大学大競争時代の勝ち抜きのために、微力ではありますが今後も何らかのお手伝いをさせて頂きたいと願っています。





研究・教育冥利に尽きる大学

自然科学系(工学部)教授
山口 貢 YAMAGUCHI, Mitsugi

博士課程を修了後、26年間の会社での研究開発、11年間にわたる大学での教育・研究を振り返り感無量である。特に大学は研究・教育冥利に尽きる。両者を同じ土俵で比較することはできないが各々が名実ともに機能分担を明確にしてその使命を果たすことは極めて重要である。会社における研究開発では、スケジュール、研究資金、研究テーマには当然厳しい制約があり、且つ利潤を追求し自活していく必要がある。他方、大学ではそのような束縛はなく自由闊達に旺盛で独創的な研究活動を展開できる。会社では多くの優秀な技術者がグループとして機能し潤沢な研究開発費のもと先端的な研究開発を遂行できるが、大学は付属研究所などを除けば殆どが数人もしくは個人プレーに負う所が大きい。また、学生も貴重な戦力であるが教育が主眼であり数年で代謝することになるので技術の蓄積と向上を図ることは困難である。従って、一部の例外を除けば大学での研究は研究者一

個人の極めて優れた頭脳に依存していると考えられる。

しかし、昨今、教育・研究において大学の発信が弱く、社会からの外圧に左右され独自性が喪失しつつある。社会から遊離した閉鎖的組織は論外であるが余りにも一方向に振れているのではないのでしょうか。日本の大学はアメリカの教育・研究・管理運営を全面的に受入れ今でも追従することなのでしょう。

基礎を教育できるのは大学であり、一方、目先に捉われない研究が望まれると共に大学は発明の宝庫で社会に非常に貢献できる。学内外に氾濫する意味不明の米語(ホワイトカラー・エグゼンプション、バウチャー制度など)、主客転倒しがちな境界・複合領域、故意に複雑にせざるをえない組織、社会に阿なければならぬ教育と研究、管理運営などと課題も多いが、もっとも誇りを持ち自信を回復する事が重要と考える。



新潟大学を退任するにあたっての思い

自然科学系(工学部)教授
関根 征士 SEKINE, Seishi

私が生まれた年の1941年12月8日、日本海軍が真珠湾を奇襲攻撃して太平洋戦争が始まりました。当時の日本は、中国、朝鮮(今日の韓国と北朝鮮の地域)を侵略して台湾と朝鮮を植民地にしていました。しかし、1945年に天皇主権の大日本帝国が崩壊して植民地は解放され、1947年に国民主権の日本国憲法が施行されました。それから今日までの60年間、一人として戦争による犠牲者を出していません。それは憲法第9条があるからです。ところが、昨年12月、日本国憲法の理想の実現は教育の力にまつべきものであるとして制定された教育基本法が改定され、国家による教育介入の歯止めが取り払われました。また、本年1

月に防衛「庁」が「省」に昇格され、安倍首相は年頭会見で「ぜひ憲法改正を目指したい。」との決意を表明しました。これは「自衛軍」(自民党憲法草案)をもち「戦争しない国」から「戦争する国」への転換をめざすものです。

新潟大学では、1987年、教職員の過半数署名により「新潟大学非核平和宣言」を制定しました。宣言は「戦争や軍事を目的とする教育研究を拒否し、科学・技術・文化・芸術の固有の発展をめざし、研究・教育・医療が平和と人間の尊厳を守り、社会の発展に寄与するよう務めます。」と謳っています。これが私のコンパスであり、座標軸です。

自然科学系



退任するにあたっての思い

自然科学系(工学部)教授
安東 政義 ANDO, Masayoshi

私が、新潟大学工学部に赴任してから、18年間で過ぎようとしています。現在、ドラフトチャンバーを備えた広い実験室と居室、機器類の充実、博士課程前期および後期の学生定員の確保と充実した教育研究環境で仕事をやらせていただいております。癌の化学療法と関係深い、①抗炎症剤、②制癌剤、③耐性癌に有効な制癌剤の開発の研究で、成果をあげる事が出来ました。その要因の一つは、学術振興会の、2名の外国人特別研究員のグループへの参加(2001-2003年)と日中科学協力事業共同研究(2003-2005年)への採択です。これにより、中国研究者の研究能力と質の高さを実感しました。またこの期間(2000-2006年)に9名の博士課程の学生に恵まれました。大学での自然科学系

での研究の担い手は、博士課程後期の学生であると思います。生理活性試験は、三菱ガス化学新潟研究所、癌研究会の御協力をいただきました。三菱ガス化学の長谷川俊明さん、東京工業大学の片岡孝夫先生、中国科学院薬物科学研究所(上海)の李娜博士、中国医科学院薬物科学研究所協和医科大学(北京)の戴均貴副教授、チチハル大学・化学と化学工程学院、院長張樹軍教授と分野の違いや、国の違いを越えて一緒に仕事をする事ができました。最後に、良い教育と研究の場を与えていただいた新潟大学に感謝をすると共に、本大学がさらに発展する事を祈って本文を終らせていただきます。

自然科学系



新潟大学を退任するにあたっての思い

自然科学系(農学部)教授
楠原 征治 KUSUHARA, Seiji

当時、新潟市小金町にありました新潟大学農学部に着任して以来、37年の歳月が流れ、この3月末に大学を去ります。「教えることは学ぶこと」を実施しながら、学生諸君と充実した時間を過ごせましたことは、何者にも代え難いことです。

この37年間、農学の一部門として畜産学の教育研究に携わってきました。畜産は家畜を飼育して人の生活に役立つ物資を生産し、その利用をはかる産業であり、畜産業は1960年以降著しい発展を遂げ、肉類、鶏卵、牛乳およびそれらの加工品によって日本人の食生活の改善を図ってきました。一方、畜産学は家畜の改良、繁殖、飼育と、その食品の並びに経済的利用についての理論と応用を対象とする学問分野として、畜産業とともに発展

してきてきましたが、近年に至って、生命科学という学問分野が急速に進展し、畜産学にはこれらの分野を包括した新たな方向への指向が現れました。慣れ親しんできた畜産学科という名称も、1990年代に入って40校余の大学からはほとんど消え、新潟大学農学部においても学科の改組で名称が変わりました。消えたというよりも、畜産という文字の変わりに、生命、生物、動物、資源、環境などの単語群に科学をつけて、新しい学科やコースの名称を作り上げました。学科やコース名は変わるべくして変わったのかも知れませんが、21世紀の農業はもちろん畜産の行方を暗示しているように思います。



新潟大学を退任するにあたって

自然科学系(農学部)教授
鈴木 敦士 SUZUKI, Atsushi

私が農学部畜産学科助手として小金町の木造校舎に赴任したのは1971年9月のことでしたから、すでに35年が経過した事になります。月日の経つ速さを実感しています。

農学部は1974年に五十嵐地区の新校舎に移転し、総合大学の一員として発展をとげてきましたが、校舎の老朽化とともに私も年を取り定年を迎えることになりました。

赴任当初、卒論学生が滞留しているような研究室でしたが、少しずつそれも解消され、備品も整備されました。博士課程設置後、博士の学位取得者(論博2名を含む)が10名に達し、その中の留学生3名は母校に帰って助教として活躍しています。

卒業論文で「筋肉タンパク質に関する研究」の手ほどきを受けて以来、博士課程、米国留学中、新潟大学赴任後も首尾一貫して「筋肉から食肉への変換機構を筋肉内在性タンパク質分解酵素の作用」という観点から研究し、かなりの成果をあげる



卒業祝賀会にて

事が出来ました。1989年からは、「超高压処理による肉質制御」という課題も加わり、退任後も本学に於いて新たな展開が期待出来そうです。また、学部の垣根を超えて活動してきました「新潟大学地域連携フードサイエンス・センター」が2007年度概算要求項目として採択されたことを大変喜んでしています。

35年6ヶ月の長い間大過なく過ごす事が出来た事は、多くの教職員の方々のご助力の賜であり、厚く御礼申し上げるとともに本学及び農学部のさらなる発展を願ってお別れの言葉と致します。



ひとすじの道

自然科学系(大学院自然科学研究科)教授
杉山 博信 SUGIYAMA, Hironobu

新潟大学に1997年に着任しましたので、3月で丁度10年がたちます。早いものです。前任大学での在職期間26年を合わせると、36年になります。一貫して、水文・水資源工学にかかわる研究・教育に携わってきました。

その間の社会の変容は激しく、それに伴い大学のイメージも大きく変化しました。当然、水文・水資源工学に向けられた社会的な要請や期待も変化しましたが、今も昔も、「水の循環を科学する」ことを目標に掲げて、「ひとすじの道」を歩き続けてきました。

30余年間、すばらしい恩師の知遇や仲間の援助を得て、フィールドで水の循環を視る感性を研ぎ澄ますことができました。とりわけ、



集中講義終了後の集合写真(JICAにて)

本学に着任早々、新潟県北に設置した試験流域を舞台にした野外セミナーやフィールドワークは、教育・研究活動の忘れがたいものとなりました。

本学での研究・教育活動は、楽しい思い出が多く、新潟を離れても、それは折にふれて浮かび上がってくることでしょう。

最後になりましたが、お世話になりました皆様方、ありがとうございました。

医歯学系



コロンブスの卵へのチャレンジ

医歯学系(大学院医歯学総合研究科(歯))教授

川島 博行 KAWASHIMA, Hiroyuki

アメリカ大陸を発見したことに対して、「そんなことは誰にでも出来る」といわれたコロンブスは、「それなら卵を立ててみる」とチャレンジし、誰もが試みて出来ないのを確認した後に、卵の尻(底)をつぶすことによって立てて見せた、と言われている。だが真相は、卵を立てることができた者に教会建築を受注させてはどうかと、同時代の建築家ブルネレスキが提案し落札して見せたのを、コロンブスの伝記を書いたベンゾーニが流用したということらしい。以来「コロンブスの卵」といえば、誰にでも可能なことではあっても始めて実行するのは難しいものだ、という意味で使われている。しかし、無傷の卵を立てることは不可能なのだろうか? 遠い昔の少年時代、私もそのように疑ったことがあった。当時日本は貧しく、卵をオモチャにして遊ぶなど許されることではなかった。時が過ぎて、たまたま読んでいた本に、卵は立つ、とさりげなく書いてあった。思わず本当かと叫ぶほど興奮したが、多忙で試みる間もいままさらに時が過ぎた。本学に赴任して数年経過したある日、市場で買って来た卵を並べて見ているうちに、卵の形にも個性があるのに気がついた。そのとき突然上記の本の記憶が甦ったのである。対称性が高く重心の安定しそうなものを選んで試みたところ、果たせるかな、数分の後に卵は見事にテーブルに立ったのである。もちろん、これは生卵、すなわち、生きている卵だから、一度重心が安定してしまうと、そう簡単に倒れないことも確認できた。大きな振動を与えない限り終日立っている。可能とわかってしまうと、かなり歪(いびつ)な卵でも立てられるようになった。まさに、コロンブスの卵、である。写真は、研究室の机に立てた時のものだ。ゆで卵が立ち得ないのは明らかだが、生卵が立ち得ることをコロンブスあるいはブルネレスキは知っていただろうか? いずれにして

も、「コロンブスの卵」の意味するところは不滅だ。学生諸君には、「常識を疑う」柔軟性と「独創的発想」を可能にする真の学力を身につけるよう心がけてほしいと思う。

11年の在職期間を通じて直接・間接にご支援下さった関係各位、また、学生・院生の皆さんに深謝いたします。長いことお世話になりありがとうございました。



スチールの机上に立つ生卵



医歯学系



人と人との繋がりに感謝

医歯学系(大学院医歯学総合研究科(歯))教授
野田 忠 NODA, Tadashi

昭和54年、37歳で歯学部小児歯科の教授になりました。子どものむし歯の洪水の時代でしたから、そんな年齢でも教授になりました。それから28年、昔大騒ぎで治療した子が、子どもを連れて診療室に来るようになりました。これは新潟のありがたいところで、人と人との繋がりが、地域全体を包み込んで、それが年月を経ても続き、さらに広がっていきます。教養でやっている『食べる』という科目では、食の陣代表の本間龍夫さんや伊藤文吉北方博物館長など、新潟で次々に広がる人脈のお陰で、講義に魅力が出て学生の支持を得ました。

37歳の若造の教授は当然のように学生担当となり、全学の会議では各学部の同じような人たちと顔見知りになりました。その



講義「食べる」の実習にて

人たちと一緒に歳をとり、歯学部病院長や旭町分館長になったときも、評議会など大学トップの会議でも、気軽に本音で話し合えました。

新潟大学の28年間、数多くの人と出会って、多くのものを貰いました。特に学生さんとのいろいろな出会いは、彼らに思い出を残しているかどうかは分かりませんが、これからの私の人生の大きな支えになるでしょう。

人文社会・教育科学系



サーフィンのはてに——大学改革への反省

人文社会・教育科学系(大学院実務法学研究科)教授
山下 威士 YAMASHITA, Takeshi

ドイツでの在学研究から帰ってきた直後に、小島康裕法学部長から、大学設置基準の大綱化に即応する抜本的な将来構想の検討を命じられました(1990年4月)。鯨越溢弘、葛西康德教授らの優秀な若手を集めて、徹底したブレインストーミングを行い、基本的な戦略図を構築しました。この検討の際に、私の提出した唯一の要求は、「自分の入りたい大学、学びたい法学部を構想せよ」でした。スーパーと同様で、「店員が、自分の店で買い物をしたくないような店に、誰が買い物にくるか」という発想です。この戦略図に従って、全学的には、武藤輝一学長の下で、現代社会文化研究科・博士(後期)課程の新設、商業短期大学部や教養部の改組へ協力し、法学部については、全国唯一の法政コミュニケーション学科・研究科や、社会人教育のための「夜間主コース」を新設しました。このような改革は、やがて荒川正昭

イラスト:『法学部案内1995年版』に掲載の
学生が書いてくれた法学部長としての私

学長の下で『学際的基幹大学としての新潟大学』(グリーン・ペーパー、1999年1月)としてまとめられました。このころの私について、「文部省の課題という波に乗って、サーフィンをしているようなもの」という某学部長の名(?)批評もいただきました(新潟日報編『大学が地域を変える』1997年、78頁)。

かくして行き着いた先が、独立行政法人化の現状とは。もちろん、これは、私どもの努力であるよりも、国家の基本的な文教政策のなせることではありますが。現状は、絶望的に困難に思えます。しかし、私どもの改革は、どんなものにせよ、自由作文ではなく、多くの条件の下で行われる課題作文です。どんな困難があろうとも、新潟大学の、優れた方々が、必ずやその能力を発揮されて、将来への道を示してくださると期待しております。

全学講義開講

学生の総合的な知見を高めるため、学外から講師を招いて行っている全学講義。平成18年度に行われた東京工業大学・東浩紀教授の「ポストモダンと情報社会」と、鹿児島大学・山田和彦教授の「異種移植の最前線」を紹介します。

全学講義:1

「ポストモダンと情報社会」

- 2006年12月20日(水) 15時30分から17時まで
- 人文社会学系棟A20講義室
- 講師/東 浩紀(東京工業大学世界文明センター人文学院特任教授)



東氏の講義を聴きながら筆者がメモに書きつけた言葉は「過激な明晰さ」でした。現代社会の病理と狂気をざっくばらんな明晰さで分析し、安易な希望で味つけすることなく、そのままごろりと聴衆の前に投げ出す。しかしそのような残酷さは論壇人の気取りとは無縁なユーモアに伴われていて、立ち見ができるほど会場を埋めつくした聴衆を魅了したのでした。

今回、批評家の東浩紀氏をお呼びしたのは、あるいはこれまでの全学講義からすれば異例のことだったかもしれません。大学在学中に批評家としてデビューし、サントリー学芸賞を受賞したデリダ論『存在論的・郵便的』では浅田彰に「私は『構造と力』が完全に過去のものとなったことを認めたのである」とまで言わしめた氏は、フランス現代思想の研究者としてスタートしながら、『新世紀エヴァンゲリオン』をきっかけに次第にアニメやゲームといったサブカルチャー批評の領域に進出し(『動物化するポストモダン』)、情報化や9・11以降の世界といった社会的な問題に対しても旺盛な批評活動を展開してきました(『情報自由論』、『自由を考える』)。狭いアカデミズムに閉じこもることなく、つねに現在社会の最先端の問題にとりくんできた氏の

批評は、ある意味では閉塞した大学の現状に対する鋭い批判でもあったわけで、今回、そんな東氏を全学講義の講師としてお招きしたことは、ひょっとすると、新潟大学が自らのアカデミズムのあり方を反省しはじめたきざしなのかもしれません。

講義は、「ポストモダン」と「情報社会」という、一見したところ無関係にみえる事態の共犯関係を探るものでした。60年代フランス哲学と70年代アメリカ消費社会の結合によって生み出され、80年代の日本でも大いにもてはやされたポストモダン思想は、「進歩」「正義」「精神」といった、モダン(近代)社会の「大きな物語」に徹底的な批判を加えるものでした。近代社会は、学校や監獄といった制度を通じて、個人に「主体的であれ」「正しくあれ」と呼びかけます。一つの正しい規範に向かって全員が努力せよ——これが近代社会の抑圧的なメッセージであり、それを支えていた統治の技術が、哲学者ミシェル・フーコーのいう「規律訓練」だったのです。東氏のたどる秀逸で、忘れがたいものでした。「近代社会とは「酒を飲んだら乗るな」と市民に言いつづける社会である」。

ところが、いまは違う。わたしたちの社会は「酒を飲んだら、呼気のアルコール度数を自動的に測定して、自動車が発進しなくなる、そんな技術を夢見る社会である」。ポストモダン(脱近代)社会は他人にうるさく説教しようとはしない。それはもはや規律訓練の原理では動いてはいない。そのかわりに、わたしたちの社会は「環境管理」をめざす——東氏はそう言うのです。

多様性と差異に寛容であろうとしたポストモダン思想の浸透は、ライフスタイルの多様化、共通の価値観の崩壊を極限まで推し進めてしまいました。その結果、わたしたちはもはや、社会的コンセンサスの形成や価値観の共有をほとんど期待できない状態に陥っています。公園のベンチで寝るなといっても聞く耳を持たない者がおり、深夜に盛り場をうろつくとなれば「うざい」とかえす少年少女たちがいる。



価値観の多様性という建前上、しつこく説教するわけにもいかない。ではどうするか？ ベンチに区切りを入れて寝たくても寝られないようにする、深夜のコンビニやファミレスは条例で青少年立ち入り禁止にし、のこのこやってきた奴は条例をたてに一律補導する。現代社会は、多様化した一人一人の価値観を「放置」するかわりに、環境の操作によって画一的なリスク管理をおこなおうとするのです。魂ではなく身体で管理する。酒を呑んだら自動的に運転できないようにする——その意味で、環境管理はポストモダン化の社会的要請であったのです。そして今日、情報技術の発展によって環境管理はますます巧妙化しています。例えばインターネット。たしかにインターネットは多様化した個人の欲望に応じてきました。匿名掲示板で個人を中傷する、猥褻な画像を収集する、ブログやMIXYで共通の趣味をもった人々

の小さなコミュニティーを形成する——どれも自由です。しかし私たちはそこにリスク管理の見えない網の目が張られていることに気づかない。高性能検索マシンは、本当に危険な情報はブロックすることによって、誰にも気づかれぬままリスク管理をおこなっている。極端な自由主義的寛容と思われるものは、実はわたしたちの身体・行動を管理する工学的・情動的技術の洗練と一体になっているのです。目に見える自由と、目に見えないコントロールのあいだで、真の「自由」はいかにして可能か——それが、東氏が投げかけた緊急の問いであったように思います。そして、安易な解答を拒絶するこの重い問いは、講義を聞きに集まった一人一人に届いたはずで

(文責:人文学部情報文化課程 助教授 番場俊)

全学講義:2

「異種移植の最前線」

- 2006年11月6日(月)17時から19時まで
- 医学部第3講義室
- 講師／山田和彦(鹿児島大学フロンティアサイエンス研究推進センター教授)

1 はじめに

私は、これまで12年間ハーバード大学外科に在籍し、2003年からはマサチューセッツ総合病院Transplantation Biology Research Centerの大動物移植免疫寛容・異種移植部門のHeadとして、またハーバード大学外科准教授(Associate Professor)として、臨床応用を目指し大動物を用いた前臨床異種移植実験を行ってきた。また本年からは、鹿児島大学フロンティアサイエンス研究推進センターの異種移植分野にて、これまでの米国での成果をもとに、日本国内における異種移植の臨床応用を実現すべく研究室を立ち上げた。

まず明記すべきこととして、私自身そして私の指導者であるハーバード大学外科教授・Transplantation Biology Research Center所長のDavid Sachsは、これまでの成果から、異種移植の成功は世界的な移植臓器不足の問題の解決につながる確実、かつ実現可能な方法の一つと成り得ると強い信念をもって研究を推し進めていることである。後述するが2002年末の異種抗原の主役である

galactose- α 1,3-galactose (Gal) 抗原をノックアウトしたブタの誕生¹⁾は、異種移植の臨床応用への大きな進歩であり、ブタ・ヒト異種移植の最大のハードルとされてきた超急性拒絶反応の克服を可能とした。そして、そのブタをドナーとし、私の米国の研究室で行った世界初のGalTノックアウトブタ・ヒト間同所腎移植では、すでに80日以上にわたり腎機能が安定した異種移植臓器の生着を得ている²⁾。今後、さらに免疫寛容導入を確実なものとし、免疫抑制療法を改善することで、より長期間の移植臓器の生着が可能と考えている。

日本においても異種移植の研究は行われてはいるが、大動物を用いた実験となると急性実験のみであり、前臨床実験といえる異種移植長期実験は行われていない。日本の移植を専門とする医師との会話の中でさえ、言葉の壁による情報収集の問題からか、近年の異種移植進歩に対する知見がないことがあり、異種移植を夢物語としている意見を聞くことが少なくない。本全学講義により、聴講されている先生方が、「解決すべき様々な課題が残されているが、ブタの臓器をヒトに移植する治療法が臨床応用される日が近づいている」と感じ取っていただくことを願っている。

2 なぜ異種移植が必要か？ どのような根本的対応があるか？

なぜ異種移植が必要か、の答えは、現在慢性的な臓器不足となっているからである。移植医療の成績向上に伴い、移植用臓器の不足は世界各国共通の問題となっている。日本でも1997年10月に「臓器の移植に関する法律(臓器移植法)」が施行され、脳死患者からの臓器移植が始まった。しかし、2006年10月現在、脳死下での臓器提供は49例に留まり、毎年多くの移植待機患者が移植を受けることなく亡くなっている。

ではどのような根本的対応があるか?、について簡単に述べる。臓器不足下での末期臓器不全に対する根本的対応としては、再生医療、人工臓器、そして異種移植があげられる。近年、末期臓器不全に対して人工臓器による置換や再生医工学を用いたアプローチが脚光を浴びている。しかし、現在のところ組織移植は期待できるものの、3次元構造を持った機能性臓器という点において、臓器移植に代わる治療法として臨床応用に定着するまでには至っていない。そこで、ドナー不足を解決する最も有効な手段のひとつとして、異種移植(Xenotransplantation)が注目されている。我々の施設(Transplantation Biology Research Center, Massachusetts General Hospital, Harvard Medical School)では、1990年前半から異種移植の臨床応用を目指した研究を行い、2002年には前述の如く異種Gal抗原をノックアウトした、 α -1, 3-galactosyltransferase (GalT)ノックアウトブタ(GalT-KOブタ)を誕生させ、筆者の米国研究室(Organ Transplantation Tolerance and Xenotransplantation Laboratory, Head: Kazuhiko Yamada, M.D., Ph.D.)で人間に近いヒトをレシピエント、そのGalT-KOブタをドナーとし、世界最長となる80日以上異種移植腎正常機能での生着を報告するに至っている²⁾。腎臓という機能性臓器で、大動物において体内埋め込み型人工臓器または再生医療技術での腎臓を用いて、この異種移植の結果に匹敵する結果を示した報告はない。

3 臨床異種移植における ドナーとしてのブタの意義

異種移植はconcordantとdiscordantに大別されるが、ブタからnon-human primateやヒトへの移植はdiscordant異種移植である。両者の違いは自然抗体(異種移植では異種抗体)の有無により区別され、discordant異種移植では移植直後に超急性拒絶反応が起

こる。免疫学的観点からは、concordant間異種移植のハードルはdiscordant間異種移植に比べて超急性拒絶反応が起こらない分だけ低い。しかし、ドナーとしてnon-human primateを用いる場合、(1)その供給数が限られること、(2)ヒトに対して危険なウイルスに感染している可能性が高いこと、また(3)倫理的問題などにより、現実の治療法としての確立は困難と考えられている。異種移植は臓器不足という大前提の下で研究が進められている。供給の限られるNon-human primate(サルやヒビ)をドナーとすることは免疫学的バリアー以前の問題である。一方、discordant間異種移植では、これらconcordant間で挙げられる問題点は克服可能と考えられる。ブタをドナーとする異種移植はこの中に分類される。人はブタに対し、異種抗体(主に抗Gal抗体)が存在し、それにより超急性拒絶反応が生じることから、これが異種移植臨床応用への道に大きく立ち塞がった。しかし、特に臓器の大きさ、解剖学的類似点、繁殖の容易さ、遺伝子操作の可能性、そして倫理面において、ブタが臨床異種移植でのドナーとして最適であると考えられ、研究が進められた。

4 異種移植での最初のかつ 最難関バリアー ：超急性拒絶反応

1990年代初めには、discordant異種移植後に出現する超急性拒絶反応の原因として、galactose- α 1,3-galactose (Gal) 抗原がヒトへの異種抗原であることが同定された³⁾。ブタに限らず、ヒト



お話しくださった山田和彦教授(右)と医学部の高橋太太教授(左)。

およびnon-human primate以外のほとんど全ての哺乳類は、細胞表面にGal抗原を発現している。一方、ヒトおよび大部分のnon-human primateはこのGal抗原を発現しておらず、自然抗体としてGal抗原に対する抗体(抗Gal抗体)を持っている。ブタの臓器をprimateに移植した場合、まずprimateの血清中に存在する抗Gal抗体がブタの血管内皮細胞表面のGal抗原に結合する。引き続き補体が活性化され、数分から数時間で超急性拒絶反応が起こり移植臓器は廃絶される。ヒトおよび一部のnon-human primateにはGal抗原以外のエピトープに対する抗non-Gal抗体も存在するが、異種移植での超急性拒絶反応を引き起こす主要な抗体は、抗Gal抗体であると考えられている。

5 超急性拒絶反応を克服するための試み

ブタからヒトへの異種移植を成功させるためには、この抗Gal抗体による移植臓器への攻撃をいかに克服するかが重要である。この超急性拒絶反応を回避する手段として、(1)自然抗体の除去、(2)補体活性化の抑制、(3)標的抗原であるGal抗原の除去が積極的に試みられてきた。

自然抗体の除去としては、臨床におけるABO不適合間移植に準ずる、自然抗体吸着カラムを用いて吸着する方法、そしてレシピエントの血液を異種臓器(ブタがドナーの場合ブタ臓器・腎または肝臓)に環流し自然抗体をブタ臓器に吸着させる方法がある。ABO血液型抗原の決定基は、Gal抗原と同様に糖鎖抗原である。臨床でのABO不適合腎移植では、術前に抗A、抗B抗体の吸着を行い、以後ABO適合間腎移植の場合と同様の免疫抑制療法で、良好な移植腎生着率が得られている。このことから、ブタ・ヒヒまたはサル間での異種移植の際、Gal抗原に対してもABO不適合間と同様の成功が得られることを期待し、欧米では血漿交換法、また我々の施設では抗Gal抗体吸着カラムを用いて、移植前に抗Gal抗体を一過性に除去することを試みた。これらの手法により異種移植前に血中抗Gal抗体はほぼ完全に除去され、超急性拒絶反応は回避された。しかし、ABO不適合腎移植の場合⁴⁾とは異なり、移植後に強力な免疫抑制剤を用いても、新たに産生された抗Gal抗体により、移植後1～2週間で移植臓器は拒絶された⁵⁾。

補体活性化の抑制としては、C3bアナログによりC3を枯渇させることで補体活性抑制作用を発揮するcobra venom factor (CVF) や、C3bおよびC4bに結合することで補体活性化を抑制するsoluble complement receptor type1 (sCR1) などの補体制御

抑制蛋白の投与が試みられている。さらに、membrane cofactor protein (MCP)、CD59、human decay accelerating factor (h-DAF) といったヒトの補体制御蛋白遺伝子を導入し、ブタの血管内皮細胞にこれらの蛋白を発現させたトランスジェニックブタが作製された。種特異的な作用によりブタの補体制御因子は、non-human primate もしくはヒトの補体活性を抑制できない。しかし、h-DAFトランスジェニックブタの臓器をnon-human primateに移植すると、移植臓器に反応した抗Gal抗体による補体の活性化を抑制できる。我々の施設でも、このh-DAFトランスジェニックブタの腎臓をヒヒに移植する実験を行った。全例で超急性拒絶反応は回避されたが、胸腺と共に腎臓を移植し、T細胞免疫寛容を誘導する筆者の確立した戦略を用いても、Gal抗原に対する液性拒絶反応により、全ての移植腎は30日以内に拒絶された⁶⁾。また、他施設ではh-DAFトランスジェニックブタ・ヒヒ間異種腎移植で、1例のみ血清クレアチニンが高値ながらも75日間生着という報告がある。しかし、この症例も早期に尿管が拒絶され、75日目には移植腎は完全に機能が廃絶した。

Gal抗原の除去については、その完全除去には前述の如く α -1,3-galactosyltransferase (GalT) をノックアウトすることが必要であるが、われわれの施設で2002年末にそのGalT-KOブタを誕生させるまでは、完全GalT-KOブタは誕生または生存しないのではないかと危惧された。このためGal抗原の低発現を目指した研究が数施設で行われた。その中に、 α -Gal epitopeを分解するEndo-beta-galactosidase Cを用いてGal抗原構造を破壊する方法、alpha-1,2-fucosyltransferaseの糖鎖遺伝子を過剰発現させることで酵素拮抗阻害により糖鎖末端でのガラクトース付加を抑制し、Gal抗原の発現を抑制する方法などが上げられるが、いずれもGal抗原の発現を完全には抑制できていないブタである。我々は、完全GalT-KOブタの作成過程で、その副産物ともいえるGal低発現ブタ(95%以上Galの発現が抑えられている)をドナーとしてブタ・ヒヒ間異種腎移植を行う機会を得た。結果として、異種尿管は1～7日、腎自体は11～15日で完全拒絶された。このことから我々は、少なくとも異種腎移植においては、Gal抗原の完全ノックアウトが必須であり、Galの発現を抑制する戦略では不十分であると結論付けている。

6 GalT ノックアウトブタを用いた前臨床異種移植実験

2003年2月、我々の施設で世界初のホモGalTノックアウトブタからヒヒへの異種移植実験が行われた。現在はUniversity of Pittsburgh Medical Centerに移ったDr. Cooperのグループが

異所性心移植、そして私の研究室が免疫寛容導入の手法を用いた同所性腎移植を担当した。異所性心移植実験では、GalTノックアウトブタの**心臓**がヒヒの**腹部**に移植された。ほとんどの症例は細胞性または液性拒絶により、移植後50～70日ほどで拒絶されたが、最長例で179日間の生着を記録した。この最長例は、これまでの**異種間異所性(非機能性)心移植**の報告において、最も長い生着日数である。しかし、維持期の拒絶反応をどのように克服するか、また**臨床応用の視点からは、同所性に移植された異種心臓(生命維持機能臓器)がレシピエントの生命をどの程度の期間維持し得るかを検討しなければ**ならない。

私は1995年にブタ・ヒヒ間異種T細胞性免疫は、少なくとも同種間のそれに匹敵することを明らかにした⁷⁾。更にこの異種間T細胞反応を克服するための戦略の一つとして、ドナーとレシピエントの血管吻合術を用いるドナー胸腺直接移植法(thymokidney⁸⁾およびvascularized thymic lobe⁹⁾)を開発した。この手法を用いたブタ同種移植にて、**移植臓器の免疫寛容導入に成功**している。この同種移植での免疫寛容誘導の成功から、**私の研究室では2003年よりGalTノックアウトブタを用いブタ・ヒヒ間胸腺・腎併用移植を行っている**。この場合、前述の異種間異所性(非機能性)心移植と異なり**移植腎は生命維持機能性臓器**であり、移植腎が機能しない場合はレシピエントを失うことになる。この戦略によりまず第一報として、複数例において移植後2ヶ月以上にわたり正常な血清クレアチニン値を維持し得たことを報告した²⁾。その内の最長例となったレシピエントヒヒを、内頸動脈に挿入されていた採血用カテーテルの血栓合併症により83日目には失ったが、その間、血清クレアチニン値は安定しており、移植腎は組織学的にもほぼ正常な所見を呈していた。**本症例はブタからヒヒへ移植された異種腎臓(機能性異種実質臓器)における世界最長臓器生着日数**となっている²⁾。GalTノックアウトブタ腎臓を用いて移植を行った全例で超急性拒絶反応は回避され、また胸腺併用移植の症例では異種細胞性拒絶反応も見られていない。しかし同様の免疫抑制剤投与下で、胸腺移植を併用しない異種腎移植群では、細胞性拒絶反応とその後に続く液性拒絶反応(T細胞依存性液性拒絶反応)により、移植腎はすべて34日以内に拒絶されている。

これらのGalTノックアウトブタ臓器を用いた第一報において、異種移植の最大のハードルとされてきた超急性拒絶反応は全例回避し得たことを報告した。しかし、それのみでは遅延性・血管性異種間拒絶反応、特にT細胞依存性液性拒絶反応は、免疫抑制剤のみでは克服しきれなかったことを示している。このことから我々は、異種移植の臨床応用に向け、免疫寛容の戦略を更に推し進めている。また、現在世界の数施設において、このGalTノックアウトブタに補体制御蛋

白遺伝子などを導入する戦略による新たな異種ドナーブタの開発が進められている。

7 結 語

異種移植の成功は、世界的な移植臓器不足の問題の解決につながる確実、かつ実現可能な方法のひとつとなると我々の施設は考え、その臨床応用を目指し研究を推し進めている。解決すべき様々な課題が残されているが、ブタの臓器をヒヒに移植する治療法が臨床応用される日が近づいていることは確かである。本稿を読み意見または研究に参加に興味を持たれた方は、kyamada@gis.netへEmailを頂ければ幸いである。

本講義では、上記のほかに、(1)異種移植の同種移植と比較した利点、(2)臨床応用の場合に異種移植で救える可能性のある対象patientsなどを解説したが、紙面の都合上本稿では割愛した。

文 献

- 1) Kolber-Simonds D, Lai L, Watt SR, et al. Production of alpha-1, 3-galactosyltransferase null pigs by means of nuclear transfer with fibroblasts bearing loss of heterozygosity mutations. Proc Natl Acad Sci USA 101: 7335-7340, 2004
- 2) Yamada K, Yazawa K, Shimizu A, et al. Marked prolongation of porcine renal xenograft survival in baboons through the use of alpha 1, 3-galactosyltransferase gene-knockout donors and the cotransplantation of vascularized thymic tissue. Nat Med; 11: 32-34, 2005.
- 3) Galili U. Interaction of the natural anti-Gal antibody with alpha-galactosyl epitopes: a major obstacle for xenotransplantation in humans. Immunol Today 14: 480-482, 1993.
- 4) Takahashi K. A review of humoral rejection in ABO-incompatible kidney transplantation, with local (intrarenal) DIC as the underlying condition. Acta Medica et Biologica 45: 95-102, 1997.
- 5) Kozłowski T, Shimizu A, Lambrigts D, et al. Porcine kidney and heart transplantation in baboons undergoing a tolerance induction regimen and antibody adsorption. Transplantation 67: 18-30, 1999.
- 6) Barth RN, Yamamoto S, LaMattina JC, et al. Xenogenic thymokidney and thymic tissue transplantation in a pig-specific T-cell unresponsiveness. Transplantation 75: 11615-11624, 2003.
- 7) Yamada K, Sachs DH, DerSimonian H. Human anti-porcine xenogenic T cell response. Evidence for allelic specificity of mixed leukocyte reaction and for both direct and indirect pathways of recognition. J Immunol 155: 5249-5256, 1995.
- 8) Yamada K, Shimizu A, Utsugi R, et al. Thymic transplantation in miniature swine. II. Induction of tolerance by transplantation of composite thymokidneys to thymectomized recipients. J Immunol 165: 3079-3086, 2000.
- 9) Kamano C, Vagefi PA, Kumagai N, et al. Vascularized thymic lobe transplantation in miniature swine: thymopoiesis and tolerance induction across fully MHC-mismatched barriers. Proc Natl Acad Sci USA 101: 3827-3832, 2004.

CAMPUS INFORMATION

第55回 卒業制作展

2007年2月1日～6日 新潟県民会館3階ギャラリーA



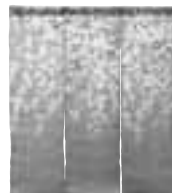
大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修の修了生と、教育人間科学部芸術環境創造課程造形表現コースと学校教育課程美術専修の卒業生による卒業制作展が開催。多くの方々が来場し、学生たちの作品に関心深く鑑賞していました。



風詠

横山真知子 ● 教育人間科学部 [彫塑]

風紋は、自然がつくる模様でとても美しいと感じます。その風紋と、素材である木の持つ形の流れが結びつき作品制作に至りました。みる人に作品から何かしら感じていただけたらと思います。



※作品の絵柄の一部を表紙に掲載しています。

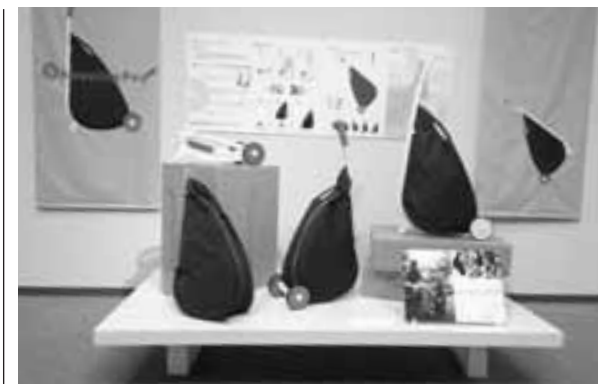
表紙掲載作品

花嫁暖簾

阿部育子 ● 大学院教育学研究科 [洋画]

加治川の桜、金魚台輪、新発田城三階櫓の鯨、酒蔵の杉玉。新発田で出会ったものや文化をモチーフに同市の染色職人にご指導いただきながら町並みを彩る暖簾を作りました。これは一昨年、新潟市内野町で開催したアートプロジェクト「うちのDEアート」で行った、通り沿いの民家に暖簾を架けるといふ企画から発展したものです。人や場との関わりから生まれる、生活の中に存在するアートを形にしました。

※4月中旬まで、新発田市まちなちの駅と3ヵ所のたまり駅に展示されています。



Shopping Pet

渋谷 翔 ● 教育人間科学部 [デザイン]

ペットを散歩するように気軽につれて歩けるショッピングカートの新しい提案です。歩くという行為が面倒だと思ふことが多い現代ですが、このショッピングペットを使うことで少しでも歩くことを楽しめたらと思ひ制作しました。自分が作るもので日常生活が今以上に楽しく、豊かなものになってくれたらいいと思ひます。



Living chair & Table

菅原 重郎 ● 教育人間科学部 [デザイン]

空間に溶け込むようなデザイン、「張り」のある美しいかたちを作りたと思っていました。

長期間素材と対話して見えてきたものは、今までの自分に欠けていたものでした。例えば椅子の背もたれの形を決める際、無限に存在する微妙な稜線のパターンの中から最良のものを自分の眼で見極め、すくい上げていく行為。最も単純で当たり前だと思っていたことが、作品の質を決める重要なアプローチであることを理解できた気がします。



サボテン

久納紹子 ● 大学院教育学研究科 [日本画]

人には長い年月をかけて培った「癖・型」が存在するようです。本来的くしゃみの前後にかけ声を入れる人、手洗いの際に蛇口に水をかける人、そしてティッシュを配る際小指を立てる人等々、それらは「美」のあらわれなのではないでしょうか。



窓

飯塚里絵子 ● 教育人間科学部 [洋画]

日々の中で人々が何気なく素通りしているものを切り取り、違う空間に置くことによって、見る人とそのもの間にそれまでになかった関係が生まれるのではないかと考えて制作しました。約50件の家の窓をスケッチして歩く過程を経て、この作品に辿り着きました。

会場を訪れた人は「何かあるだろう」と思いながら窓の中を見ているようで、その後ろ姿を見ながら、改めて4年間学んできた美術と作者、鑑賞者の関係について考えることができました。

卒業制作展



Rheological Pillars

大山 育男 ● 教育人間科学部 [彫塑]

5本の柱は押し出し器から流れ出した粘土で構成されています。Rheologyは物質の流れの学問で、「万物は流転する」というヘラクレスの言葉に由来します。東洋なら「諸行無常」でしょうか。低火度焼成した粘土は御骨のような、魂の抜けた白さです。県民会館倉庫の空間と相乗して、悠久の時の流れと無常観を表現しました。ヘラクレスが説いた万物の根源が、陶には不可欠な「火」であったことに奇妙な縁を感じています。



merry stool

草薙 真日子 ● 教育人間科学部 [デザイン]

タイトルの「merry stool」は「陽気なイス」という意味です。このスツールは屋外に設置することを想定しています。場所を明るくするだけでなく、見た人の気持ちを少しでもプラスにできればという思いを込めて制作しました。

広報委員会第1部会

部長・編集委員長

石坂妙子(教育人間科学部)
ishizaka@ed.

委員

田中拓道(法学部)
takujit@jura.

芳賀健一(経済学部)
haga@econ.

竹内照雄(理学部)
takeuchi@math.sc.

柴田 実(医学部医学科)
mshibata@med.

川瀬知之(歯学部)
kawase@dent.

林 豊彦(工学部)
hayashi@bc.

末吉 邦(農学部)
sueyoshi@agr.

井村哲郎(大学院現代社会文化研究科)
imurat@human.

杉山博信(大学院自然科学研究科)
hydsugi@cc.

横山峯介(脳研究所)
myoko@bri.

田口 洋(医歯学総合病院)
yo@dent.

馬淵憲治(学務部長)
kmab@adm.

事務局(学務部)

TEL 262-6309 FAX 262-7516

E-mailのアドレスは、
niigata-u.ac.jpの標記を省略しています。

■新潟大学ホームページ <http://www.niigata-u.ac.jp/>

新大広報 Back Number http://www.niigata-u.ac.jp/gakugai/pr/c_forum/

新大広報のバックナンバーは上記のURLから見るができます。また、学務部学生支援課で受け取ることもできます。



新潟大学広報誌

新潟大学
Niigata University
Campus Magazine

新大広報



2007 早春号

編集・発行 / 新潟大学広報委員会・新潟大学学務部
印刷 / 第一印刷所